

放送・メディアのこれから



巻頭
提言

放送技術 これからの展望

児野昭彦 NHK

編集部レポート

“ラジコ三人衆”に聞く 越えた3つの壁

1 「これからの」放送・メディア広告

永井聖士 電通 / 石松俊之 ビデオリサーチ / 橋本昇 テレビ朝日 /
青木貴博 radiko / 酒井英典 サイバーエージェント

2 「これからの」4K・8K制作

今塚誠 キュー・テック / 伊藤秀男 伊那ケーブルテレビジョン /
山下豊 & 伊藤格 ビコム & dittok / 原大智 名古屋テレビ放送 / 金村達宣 アストロデザイン

3 「これからの」字幕放送

三田一博 総務省 / 森口翔太 ヤマハ / マルチスクリーン放送協議会 /
根橋貴文 フェイス / 泉元博 関西テレビソフトウェア

4 「これからの」IPライブ伝送

北折政樹 中京テレビ放送 / 高平樹 & 瀬能康宏 NHK / 磯部和紀 静岡放送

5 「これからの」eスポーツと ビジネスチャンス

小林大祐 アックスエンターテインメント / 中村鮎葉 Twitch Japan

6 「これからの」考える上で

奥律哉 電通 / 村上圭子 NHK 放送文化研究所

ローカル局向け リアルタイム字幕の提案

中継番組や災害などの緊急放送で求められるリアルタイム字幕放送。課題は字幕入力者の育成である。リスピーク方式とネット遠隔制作で問題解決のための方途が見えてきた。



根橋 貴文
株式会社フェイス
代表取締役

リアルタイム字幕事業の概要

字幕放送の普及は、かねてより重要な課題とされてきたが、災害が頻発する昨今、正確かつスピーディであるために、要約技術のさらなる適正化が求められている。しかし、その一方で、各放送局は制作費用の抑制を図る必要に迫られている。

特に、リアルタイム字幕制作に長けた字幕オペレータを育てるには長期にわたる教育訓練が必要である。したがって、一定の投資がどうしても避けられない。そこで、弊社ではヒューマンスキルに頼りきるのではなく、むしろ「修正ありき」という考えから出発し、コストパフォーマンスに優れた汎用の音声認識アプリケーションを導入。さらに、オペレータに特段の熟練を必要としないソフトウェアを独自開発し、コンテンツの種類や字幕量に応じて修正人員の最適化を図ることにした。

具体的には、字幕にする音声リスピーク（追従復唱）し、その肉声を音声認識でテキス

ト化する。しかし、それだけでは当然間違いを含んでいるため、文章校正を効率かつ正確に、しかも簡単に行えるシステムを開発した。その結果、一般的なJISキーボードを使い、短期習得プログラムを構築することで、周辺に住んでいるパートタイマーを戦力として、信頼に足る運用体制をつくり上げることができた。

これは地元密着型の制作態勢なので、有事の際の急な召集に比較的確実に対応できると考えている。

ローカル局向けリアルタイム字幕の提案

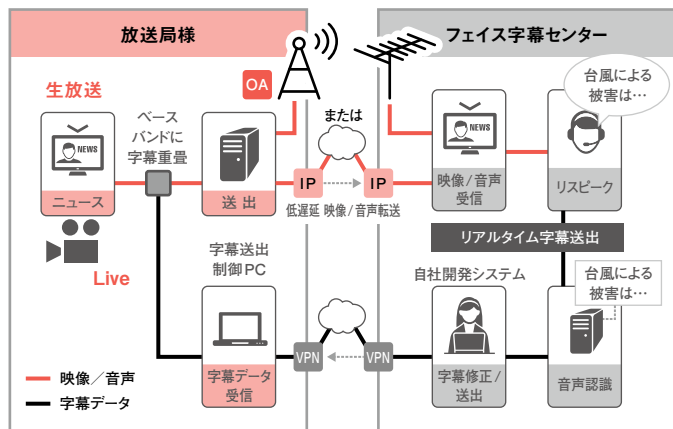
これまで全国津々浦々のローカル局から話を聞いてきた。その結果、課題が二つに絞られてきたとみている。一つは、ランニングコストとなる字幕制作費用をいかに抑えるか。もう一つは、有事の際の対応をどうするか、である。

字幕制作費用に関しては、字幕を付与する番組数によって変わってくる。レギュラー番

組で字幕付与が週に数十時間にもなる場合は、恐らく「内製化」が正解だろう。しかし、仮に不定期の番組や、週に数時間程度のレギュラー番組であれば、内製化で局内に字幕制作専門のスタッフを抱えるより、外部委託の方がコストダウンになると思われる。

次に、有事対応の問題だが、この場合の字幕付与対象番組は「生放送」であろうから、平時に字幕制作を内製化できている局であっても、日頃から地域外の外部委託先に分散発注しておくのがリスクヘッジになる。なぜなら、放送局周辺で災害が発生した場合、字幕制作者が被災者になる可能性があるからだ。

有事の際の字幕制作がなるべく滞らないようにするための施策の一環として、今年10月、従来からの松戸字幕センターに加え、東京本社にもリアルタイム字幕制作ブースを設置した。また、各局からの要望に応じるべく、関東以外の地域での字幕制作センターを開設したり、各地域のパートナーとの連携による小規模ブース構築も検討している。



フェイス字幕センターの様子